

金山明 略年譜

北川智昭

凡例

- * 本略年譜は、金山明の事績を主とし、それに若干の関連事項を加えて編んだものである。展覧会の出品歴には■、一般事項には●、文献から抜粋した項には□を附した。
- * 本年譜を編んだ意図のひとつは、金山の生涯の活動を浮かび上がらせることにある。そのため、記載事項は具体以前と具体以降の活動を重視して事績を掲げた。
- * 展覧会出品作は、制作時期を具体以前(A)、具体時代(B)、具体以後(C)に分け、作品名の後に図版番号(例：No.A-X)を附した。また作品名不詳の場合は仮題(*)で表記した。
- * 記載事項は、『具体資料集』所収年譜(芦屋市立美術館編 1993年)、「田中敦子」展カタログ所収年譜(加藤瑞穂編 田中敦子展実行委員会、芦屋市立美術館、静岡県立美術館発行 2001年)を典拠とした。

金山明 略年譜

1924 (大正13)年 0歳

7月 ●17日、兵庫県尼崎市に、市内神田中道で呉服屋「ねるや」を営む父道寛、母すへの六男として生まれる。

1937 (昭12)年 13歳

4月 ●大阪商業学校(現在・大商学園高等学校)に入学。

1939-40 (昭14-15)年 15-16歳

この頃 ●父道寛が尼崎市武庫川で旅館・蓬莱荘を始める。家族とともに移り住み、両親、長兄夫婦、兄弟らと暮らす。この時期から遠縁が住職を務めていた妙法寺(大阪市南区谷町八丁目)に出入りし始める。

1941 (昭16)年 17歳

12月 ●大阪商業学校を卒業。

1943 (昭18)年 19歳

5月 ●尼崎市大庄国民学校(現在・尼崎市立大庄小学校)の助教となる。

1945 (昭20)年 21歳

春頃 ●大庄国民学校の児童とともに疎開する。

6月 ●尼崎市大庄国民学校を退職。

この頃 ●尼崎市で古本屋を営む。

1946 (昭21)年 22歳

4月 ●多摩帝国美術学校(現・多摩美術大学)西洋画に入学。

1947 (昭22)年 23歳

●多摩帝国美術学校を退学。

1948 (昭23)年 24歳

3月 ●尼崎市立大庄中学校教員となる。 ●大阪市立美術館付設美術研究所に入所。

1949 (昭24)年 25歳

3月 ●尼崎市立大庄中学校を退職。

1950 (昭25)年 26歳

秋頃 ●大阪市立美術館付設美術研究所に入所してきた田中敦子と知り合う。

4月 ●大阪商業高等学校(現在の大商学園高等学校)教員となる。 ■新制作展に出品し始める。



1歳頃の金山明

1951 (昭26)年 27歳

3月 ●大阪商業高等学校を退職。

1952 (昭27)年 28歳

●新制作派協会で先鋭的な作品を出品していた白髪一雄、村上彦(三郎)ら、若手作家約15名でゼロ会を結成。妙法寺の住職家・伊藤家の養子となっていた実弟・良治を頼り、寺の離れで例会を開く。田中敦子もまもなく参加。

1954 (昭29)年 30歳

9月 ■第18回新制作展(東京都美術館、9月21日～10月7日、京都市美術館、大阪市立美術館を巡回)に、《作品(J3)》(No.A-62)《Work(J4)》(No.A-63)を出品。 □「大阪の砲台工場言うて、戦争の兵器をつくる広い場所で、そこが爆撃されてめちゃくちゃになってね、大阪城の後ろにあったんですけどね、大阪城の石垣の下からダァーッと何キロか焼け野原になって、しかも爆撃でくずれてしまってメチャクチャな廃墟があったんですよ。その当時ね。(金山) その廃墟にわたしはそれが好きで一人でよく行ってたんですけど、主人誘って行ったんです、こんなところがあると。それと大阪港。大阪港も煙突がずうっと高くに上がって・・・。(田中)

灯台があってな。(金山) 何というか、イタリアみたいな雰囲気のところがある。ここも好きで、二人で行っている間に金山の作品ができた。こんな煙突が四つ並んだ絵、抽象化していった。それが始まりですね、主人の絵は。(田中)」(金山明 田中敦子インタビュー／聞き手：中村政人『美術と教育・1997』日本美術協会・上野の森美術館 1997年、p.310)

11月 ■第2回ゲンビ展(松坂屋・大阪、11月13日～18日／京都市美術館、11月22日～26日／朝日会館・神戸、12月10日～16日)に、《Work-S6》(No.A-57)、《Work-L3》(No.A-60)、《Work-L4》(No.A-61)、《Work-S1》(No.A-64)を出品。

秋頃 ■ゼロ会展(そごう百貨店・大阪)に、《作品》(No.A-66)、《作品》(No.A-67)を出品。 □「僕のちよんちゃん(という作品)でも一番最初に取り上げたのは吉原さんですよ。あれはゲンビでも通らなかった。吉原さんは僕の作品を評して、モンドリアンがここまでして『ニューヨーク・ブギヴギ』という作品で死んだ。その次を金山がしたと私は思うとおっしゃってくれたのです。」(金山明、田中敦子氏インタビュー／聞き手：尾崎信一郎、山村徳太郎『具体資料集―ドキュメント具体1954-1972』芦屋市立美術博物館編 芦屋市文化振興財団発行 1993年、p.400)

この年 ●大阪市立美術館付設美術研究所を退所。

1955 (昭30)年 31歳

この頃 ●妙法寺の離れに転居。

春頃 ●ゼロ会を解散し、白髪一雄、村上三郎、田中敦子とともに具体美術協会会員となる。 □「私の子供のころからの画友の金山明は、モンドリアンの純粋抽象の作品をもっと単純化したような絵を描いていた。それを突き進めて線と色面の構成をぎりぎりまで省略していったら、ついにカンバスの縦と横の比率だけが残ることになった。そこで何も描いていないカンバスでも立派な作品であると、大まじめでこれを展覧会に出品しようとした。」(白髪一雄『冒険の記録 エピソードでつづる具体グループの12年 第1回』『美術手帖』第285号 1967年7月、p.141)

6月 ■第8回芦屋市展(精道小学校講堂・芦屋、6月8日～12日)に入選し、会員推挙となる。 □「まっ白に塗りつぶした六十号の画目の下隅に赤で「ヒ」の字の線が小さく描かれているだけという作品をだした大阪



ゼロ会メンバー 左から金山明、村上彦(三郎)、白髪一雄 妙法寺の大広間で 1952年頃

南区、金山明氏、「芦屋市展の変わり種を拾う」『毎日新聞』6月9日)

7月 ■真夏の太陽にいども野外モダンアート実験展(芦屋川畔芦屋公園、7月25日～8月6日)に、7メートル四方の白い板の中央に直径30センチの赤い球をおいた《作品 B》(No.B-1)を出品。

10月 ■第1回具体美術展(小原会館・東京、10月19日～28日)に、《作品》(No.A-67)、画面右下に三角の印をつけた《作品》(No.A-68)、赤い玉に電球を仕込んで天井に吊るした《たま》(No.B-3)、その《たま》が斜め上から大きな白いバルーンを照らしている《作品》(No.B-4)を出品。 □「ロビーから二階ホールへ入った観客は、今までどんな展覧会にも出品されたことのないものをそこに発見する。部屋の中央の天井からつり下げられたまっ白い巨大な球体、それは床までとどきそうで部屋の中央の空間を占めている。出品者金山明は部屋全体を長方形とみて、その中央に大きな球体を存在させたかったわけである。しかし観客にはそんな理屈はわからない、まっ白い大きな球体をよくよく見ると、空に浮かべられる白いアドバルーンなのである。それは観客にはユーモラスに感じられるのか、みな走りよってこれをつつきながら笑っている。このアドバルーンから少しはなれてやはり金山の差し渡し六十センチメートルもあるガラスのグローブがつりさがっていて、まっ赤な光をあたりに投射している。附近に飾られている作品を、どれもこれも赤い色に染めて知らん顔をしている。」(白髪一雄「冒険の記録 エピソードでつづる具体グループの12年 第3回」『美術手帖』第287号 1967年9月、pp.148-149)

11月 ■第3回ゲンビ展(京都市美術館、11月24日～28日/朝日ビルホール・神戸、12月1日～5日/大阪市立美術館、12月13日～19日)に、《No.1》、《No.2》、《No.3》、《No.4》を出品。

1956 (昭31)年 32歳

4月 ■一日だけの野外展(武庫川河口の廃墟・尼崎、4月9日)に、大きなバルーンを川に浮かべた《作品》(No. B-5)を出品。

5月 ■神港アンデパンタン展(神港新聞社3階ホール・神戸、5月1日～8日) 第二部・彫塑の部に会員共同で「具体グループ室」を出品。金山は、《たま》、《新聞紙》を出品。

6月 ■第9回芦屋市展(精道小学校講堂・芦屋、6月8日～12日)に、バルーンを切り取って板に貼り付けた《作品 1》(No.B-6)と、白く丸いビニールを貼り付けた《作品 2》を出品。

7月 ■屋外具体美術展(芦屋公園、7月27日～8月5日)に、電車の踏み切り用の信号灯を立てた《警報機》(No.B-8)、足跡のかたちをつけた白いビニール・シートを100メートルの長さにわたって巡らせ、最後は松の木の枝で終わる《足跡》(No.B-9)、針が逆に回転する《時計》(No.B-11)、《玉》(No.B-12)を出品。 □「会場の北の入口からはじまって南の入口まで、白いビニール布がえんえんと松の木の間をぬって敷かれている。三百メートルはあるうか、長く長く地をはってつづくのだが、この布には人が歩いたように靴形がスタンプされている。これをたどって会場を一巡できるのだが、これも作品の一つである。そのとき突然、チンチンとふみ切りの警報機が鳴りだした。あれ、こんなところに電車が通っているはずないのだが、と首をかしげながらよく見ると、まさに正真正銘のしる物である。パッパッと赤いシグナルも点滅している。これも靴形も金山明の出品物で、阪急電鉄へ出かけて、長時間、芸術論をぶち、係のおっさんを煙にまいて借りてきたものである。」(白髪一雄「冒険の記録 エピソードでつづる具体グループの12年 第2回」『美術手帖』第286号 1967年8月、p.144)

10月 ■具体美術小品展(三省堂画廊・東京、10月3日～8日)に、板を立てた作品2点(No.B-13) (No.B-14)を出品。 ■第2回具体展(小原会館・東京、10月11日～17日)に、《足跡》(No.B-9)、板を立てた作品2点(No.

